

# 東日本大震災被災地支援活動追跡調査



(医)整友会 弘前記念病院  
看護師 石井 恵  
理学療法士 鈴木 樹里  
苔米地真理子

## 【期 間】

平成24年9月6日（木）～平成24年9月8日（土）

## 【追跡調査活動メンバー】

原田生知 薬剤師（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局）

中嶋優太 薬剤師（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局）

葛西豊誠 総務（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部）

八木橋郁夫 総務（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部）

町田聖二郎 総務（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部）

石井恵 看護師（医療法人整友会弘前記念病院）

鈴木樹里 理学療法士（医療法人整友会弘前記念病院）

苫米地真理子 理学療法士（医療法人整友会弘前記念病院）

## 【スケジュール】

### 1日目 平成24年9月6日（木）

7:00 弘前出発

11:00 釜石到着 釜石で昼食

13:00 大槌町社会福祉協議会にて大槌高校避難所 元責任者の佐々木亮氏から話を伺う

14:00 大槌町役場にて保健師に話を伺う

15:30 大槌町内の開業医を回り写真撮影

19:00 釜石市内で佐々木亮さんと夕食会

21:00 ミーティング

### 2日目 2012年9月7日（金）

7:15 朝食

8:00 ミーティング

8:15 釜石出発

9:00 大槌町にて佐々木亮氏と待ち合わせる

9:15 仮設住宅にて住民から情報収集

12:00 昼食

13:00 仮設住宅で体操教室に参加，情報収集

15:00 スーパーマストにて情報収集

16:00 ベルガーディア鯨山の視察予定だったが、場所がわからず視察できず

17:50 釜石に戻る

18:00 ミーティング

19:00 釜石市内で夕食

22:00 宿に帰宅

### 3日目 2012年9月8日(土)

7:15 朝食

8:00 ミーティング

8:15 釜石出発

9:00 県立大槌高校周辺散策

9:30 県立大槌病院仮設診療所見学

10:00 大槌町仮設商店街視察、情報収集

12:00 釜石にて昼食

13:00 釜石を出発

16:30 弘前到着

17:00 境関温泉で入浴

18:15 支援活動報告会



福幸きりり商店街

### 大槌町の現状に関する情報収集

#### 【大槌高校避難所 元責任者の佐々木亮氏からの情報】

自身も仮設住宅入居され、現在もボランティア活動をされている佐々木亮氏は、仮設住宅入居時は2年契約であったが、区画整理事業が遅れているため今後3~4年に延長するのではないかと見解を述べていた。また、仮設住宅はメーカーによって建て方も異なり、建設当初は急ピッチのあまり、完全なプレハブであったが、時間を追うごとに木造など住環境が整った物へと変化していったため、団地によってかなりの差があった。しかし現在は補修が成され風呂の追い炊きや風除室も取り付けられているという。



佐々木亮氏と大槌町社会福祉協議会にて

一方、在宅世帯は震災直後支援がなかなか行き届かなかったように、現在も格差が少なからず生じているようだ。例えば、仮設団地にはボランティアやその他の支援団体が常に入っており、大雨での浸水があった際、側溝設置など素早い対応がなされているが、在宅では自らで対応しなければならなかった。

将来的に、仮設住宅から出た時のために近隣の在宅住民とのコミュニケーションがこれからの課題であり、在宅、仮設住宅者ともに物資は十分であり、与えられると何でも吸収し、いらぬということはないため、自立の遅れが生じ

るのではと佐々木氏は話す。

【大槌町役場総務部民生部福祉課 保健師 藤原純枝氏からの情報】

平成 23 年 8 月に避難所から仮設住宅への避難者全員の転居が済み、福祉課の保健師らによる全戸訪問が行われた。その際、福祉課、社会福祉協議会、生活推進課による三者会議でケース検討会が行われ、リストアップされた要支援者に対しては定期的にフォローしている。各仮設住宅には、月～金曜日まで地域支援員(LSA)4～5人常駐しており、住民の健康管理や支援を行っている。



大槌町役場

医療に関しては、県立大槌病院は仮診療所にて震災後約1ヶ月半で診療を再開し、その後、現在ある仮設診療所も平成23.6.27に診療を再開している。同年6月にJMATが撤退する際に不安を口にする住民もいたが、被災した開業医たちが再び

大槌町で開業してくれたおかげで、特に目立った混乱はなかった。また、大槌町内の歯科医4人がまとまって大槌歯科診療所を立ち上げ、歯科診療にあたっている。

医療物資に関しては、体温計・血圧計・医薬品などたくさん支援が集まり、また、足りないものに関しては平成24年度の予算に組み込み購入したため、現在特に足りないものはない。薬剤に関しては、震災直後、全国から送られてきたものを必要な人に配布したが、薬物による弊害を懸念し、平成23年8月に離乳食・湿布・絆創膏・湿布・消毒薬などを除く医薬品を全部回収し、岩手県薬剤師会に引き渡した。AEDに関しては、現在設置してある場所や震災前に設置してあった場所は不明で、必要性に関する情報は得られなかった。

### 仮設住宅の状況

平成24年8月末現在、大槌町役場被災者支援室の発表では、仮設住宅は48団地、2,106戸。入居者は2,059世帯、4,665人。入居率97.8%。町方が津波で流されているため、入居率は高いまま推移しているとのことであった。

今回、2つの仮設団地を訪問し調査した。



仮設住宅談話室

#### 【小槌第4 仮設団地】

団地敷地内に、コミュニティハウス「エコハウスおおつち」があり、同団地のみならず近隣の団地からも含む約20名の方が集まってくださり、お話を伺えた。ここでは、定期的に物作りやお茶飲み会が開かれており、特に高齢者の女性が参加しコミュニケーションをとっている。このコミュニティのお陰で震災のショックから引きこもっていたが立ち直ったとおっしゃる方もいた。

#### 【大槌第12 仮設団地】

定期的に行なわれている体操教室に参加させていただいた。空き部屋を使用し主に高齢者が集まり、被災者支援相談員が血圧・体重・体脂肪率・握力などを測定し体調をチェックした後、椅子に座り高齢者が行える体操をした。いつもは、看護師も同行し健康相談も行なっていたが、今回は同行がなかったため、相談員からの依頼で2件ほど本隊員の看護師が対応をした。体操後、集まった方々へお話を伺った。この団地では、この空き部屋がコミュニケーションの場になっている。

#### 《仮設団地を訪問して》

日常生活について：物で困っていることはない。「欲しいもの」といわれるときりがない。いただける物は何でもいただくが、いらぬものは捨てている。

健康面について：家庭血圧測定用に購入し、血圧計を持っている方が多い。通院は自転車やバス、自家用車を利用。

困っていること：無料バスが走っているが、一日の本数も少なく買い物や通院も不便を感じる。

子供たちがかわいそう。暑い中仮設の学校にはエアコンが無く、70人ほど熱中症になり、先生方が生徒をうちわで扇いでいた。あまり気温が上がるときは午前授業にしていた。

訪問した仮設団地でお話を伺えた方々は、60~80歳代であった。女性が多数を占め、男性は津波の被害を受けなかった畑で農作業をしていると情報を得られたが、働き盛りの年齢層に関しては直接情報を得ることは出来なかった。収入を得るための仕事がなく、町外へ移住する方や職がなく不安を抱えている方は多いと聞く。

「大槌町東日本大震災津波復興計画」が動き出しているが、住民と行政には温度差があり、平成30年度までの計画期間ではあるが、関わる人たちはもっと長い時間に感じるのではないかと思う。



## 大槌町の医療

### 【県立大槌病院仮設診療所】

外周のみの見学予定だったが、当番の守衛の方の計らいで急遽内部を見せて頂くことになり、日直の看護師からお話を伺う事ができた。

平成 23 年 6 月 27 日より現在の仮設診療所で診察が行われている。現在は内科、外科、整形外科、皮膚科、眼科、心療内科の診療科があり、6 月までは理学療法士がいてリハビリを行っていたが、今は不在ためリハビリテーション科はなくなっていた。元々リハビリに対する需要が少なかったため、それ程問題は無いとのことだった。



県立大槌病院仮設診療所

施設内容として診察室が 4 つあり、他は検査室、レントゲン、CT があった。以前は入院 60 床だったが、現在は外来のみで、精査や入院が必要な場合は釜石の病院に行くこととなっていた。

震災前と比較し、疾患の変化は特になく、高血圧や糖尿病などの慢性疾患のコントロールを継続して行っているとのことだった。

震災後、長崎県から来た医師により心療内科が設立されたが、あまり受診者はいないとのことだった。看護師によれば、引きこもりになってしまい、受診したくてもできない人がいるのではという話があった。

### 【大槌町の医療の現状】

大槌病院は仮設診療所として復興し、その他の大槌町内にある開業医も 1 つを除いて大槌町内での診療を再開したとのことだった。

元々、医療過疎地域であり医療面においては震災前と変わらないという意見がみられ、むしろ良くなったという意見もあった。大槌町の医療機関に関しては震災前のように復興したようだった。しかし、震災後に生じた引きこもりになった人などに対する心のケアに関しては支援が必要なのではないかと感じた。

また、仮設住宅から医療施設までの交通手段が少ないという意見があった。バスが運行しているが、本数が足りない為、不便に感じているようだった。

## 調査を終えて

東日本大震災から約 1 年半、大槌町民の約 3 分の 1 は仮設住宅に住んでいるという状況だった。私たちが、大槌高校避難所の医療班として訪れてから約 1

年と3ヶ月経過した今、あの時と比べ状況はいくらか変化が見られた。

現在住民が必要としているものとしては、保健師からの情報では、物というよりは仕事や安心して住める住居、また精神的不安に対する心のケアなどが挙げられた。スーパーマーケットが建ち、生活面においての物質的にはかなり充足してきているように感じたが、未だに区画整理が進まないために家を建てられず、避難者らは将来への不安を抱えたままである。仮設住宅の住民に今必要な物を伺ったところ、「物資でたくさんの物をもたらした。これ以上何か欲しいと言ったら贅沢になる。こうして皆さんが来てくれるだけで嬉しい。仮設住宅の生活は満足しているし、必要なものは買えば手に入る。物ではないが強いて言うなら、子供たちが将来安心して暮らせる大槌になってほしい。」という答えであった。大槌の町のいたるところで今でもボランティアが活動しているのを目にする。その中の一人にお話を聞いたところ、震災直後は全国各地から多くのボランティアが来てくれていたが、震災から1年半が経ちボランティアに参加する人がどんどん減少しており、現在マンパワーが足りない状態にあるということであった。

私たちに今出来ることは、東日本大震災を忘れずにいること、どういう形であれ支援をし続けることではないかと思う。専門家ではないので心のケアなどできないかもしれないが、ただお話を聴くだけでもうれしいと言って笑顔を見せてくれる人もいる。涙ながらに震災の経験を語ってくれる人もいれば、まだ思い出したくないと言い、多くを語らない人もいる。震災を経験した人たちの苦しみはなかなか癒える事はないかもしれないが、話をすることで少しでも楽になるタイミングで、誰か話を聴いてくれる人が傍にいるといたないとは大きな違いだと思う。そして私たちは、そこに住む人々が自分たちの手で復興しようとしたときに、傍らで支援し続けていたいと思う。

#### 【謝辞】

今回の活動に当たり、大槌高校避難所元責任者の佐々木亮氏をはじめ、お話を伺った大槌町の方々の多大なるご配慮に感謝するとともに一日も早い復興と生活の自立を祈願致します。

今回、被災地支援活動追跡調査に関わる機会を与えていただき、ご指導を下さいました当院、植山和正院長、株式会社町田アンド町田商会 町田才之丞代表取締役、並びに本活動を支援して頂いた株式会社町田アンド町田商会社員の皆様、当院職員の皆様に深謝致します。